《forum in FORUM》

分析センターの十年を振り返って

分析センター　佐　藤　　勝

昭和55年4月に、それまでに共通機器委員会に結集した学内の力によって、分析センターの設置が認められ、初代海老根センター長のもとに活動を開始した。それから既に10年の歳月が経過して、分析センターも埼玉大学の中で確固たる位置を占めるに到っている一方で、色々な点で見直しを迫られている問題も生じてきている。10年という一つの節目に当たって、これまでの分析センターの歩みを振り返ってみることもあながち意味の無いことではないと思われる。

分析センターが設置されて最初の数年間は、どのような場合でも同じであるが、その組織づくりとその定着を計ることに力が注がれた。研究員会議の進め方、運用責任者をお願いした先生方との関係、CACS FORUMの発行、CACS NEWSの発行等、様々な問題を具体化する必要があった。その他に、分析センターの建屋を、早急にしかも十分な面積で実現することが望まれた。この問題に対しては、海老根、野平、守永歴代センター長及び事務局長をはじめとする大学本部の方々の努力により、昭和60年に、情報処理センターとの合築棟の3, 4階に960㎡の面積を持つ専用建屋が完成された。

建屋の完成と共に、関連学科より分析センターにすでに管理替えしていただいていた大型分析装置が移管され、名実共に分析センターが発足することになった。建屋の完成を待っていたかのように、新しい大型分析機器が次々と導入された。昭和60年度にPSPC装置を中心とする微小部構造解析装置が、昭和61年度にはESCA−AUG装置を中心とする複合表面分析装置が昭和62年にはガスクロマトグラフ質量分析装置(GC−MS)と400MHz高分解能核磁気共鳴装置が設置された。これらの装置は、いずれも高性能の装置であり、いままでその導入が待たれていた装置であり、教育・研究の発展に大いに役立つものであった。

分析センターで大型測定装置を集中管理することは、それらの装置を良い状態で利用出来るように管理する上では非常によいことであるが、利用者の立場からみると、測定の度にわざわざ足をはこばなければならない、予約をしなければ測定できない、予約を取りに行かなければならない等の不便さがあることも確かである。しかし、前2つの不便さは、高額の大型測定装置を学内に幾つも設置することが出来ず、共同利用をする以上我慢して戴く以外にないと思われる。しかし、予約を学内の研究室から直接取れるようになればこれは大変便利になり、分析センターの共同利用施設としての役割を十分果たせると思われる。そこで、パソコンによる学内ネットワークを利用した予約システムを導入することを考え、久保技官を中心にラデックス社と共同開発を行い、昭和63年秋より利用を開始した。システムの定着と共にその便利さは予想どうりの効果を上げつつある。

このように、分析センターは、学内の教職員及び利用者の皆様に支えられつつ、順調にその役割を果たしながら10年の年月を歩んで来た。しかし、全く問題が無いわけではない。まず第一に、装置は古くなると言う点である。耐用年数を経過した装置は修理も思うように任せず、研究に支障をきたす。このような古くなった装置をどの様に新しい装置に更新していったらよいか、その学内ルール作りに皆様のお知恵を拝借したいと思う。また、分析機器の進歩は全くすばらしいもので、新型の装置が次々と現れその性能が向上して行き、今までの装置では測定できなかったデータが、新しい装置では簡単に得られるということが日常茶飯事である。概算要求の特別装置リース制で導入できるようになれば、この点はかなり改善できると思われる。分析センターが全国で20を越える日も近い

と思われるので、分析センターを組織化して、その共通要求として文部省に働きかけることも必要なことと思われる。第二に、埼玉県内で分析機関のネットワーク作りが進んでいると言う。この問題に対して埼玉大学として全く無関心のままでいる訳には行かないわけで、どの様に対応して行くのか、人員増を必要とする場合も考えられるので、問題である。第三に、このような問題を審議するのに現在の研究員会議の組織にかなり不備な点が目につくようになっており、整備する必要があるように思われる。このように、今後共、これらの問題点を少しでも解決し、より利用しやすいセンターにして行かなければならないと考えている。